

人生の全てがここにある！



ケアタウン小平

「ケアタウン小平」は、2005年10月にオープンした。聖ヨハネ会桜町病院ホスピス病棟にて、さまざまなホスピスケアに携わってきた医師の

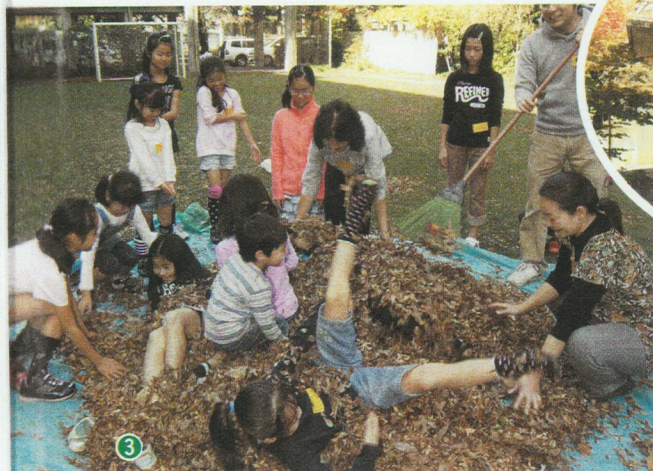
山崎章郎さんらが、ホスピス時代の仲間や遺族などの協力を得て、新たなコミュニティケアのあり方を問いかけ、取り組んでいる。



①



②



③

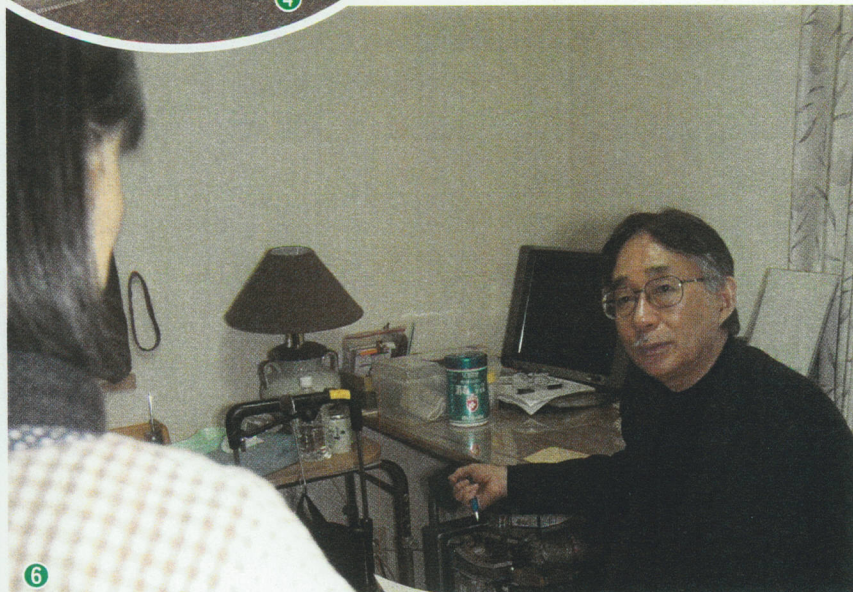


④

①ケアタウン小平訪問看護ステーション所長の蛭田みどりさんと、利用者の佐藤英子さん(79歳)。②ケアタウン小平デイサービスセンターの食事風景。③子育て支援事業「あつまれ ども広場」。この日のテーマは「秋だ！おちばだ！大作戦！」

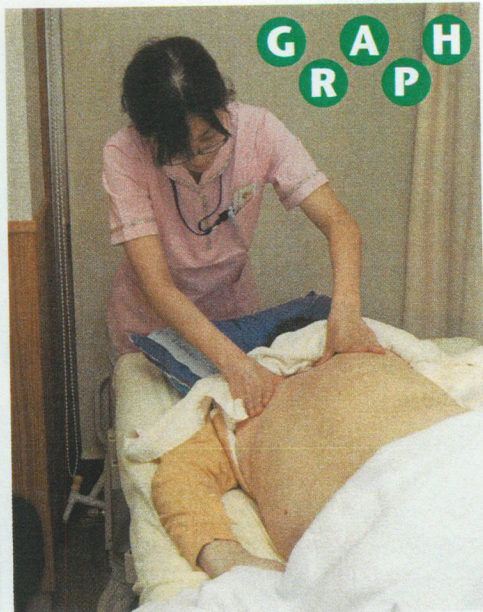


⑤



⑥

④ケアタウン小平外観。⑤いづく荘のコミュニティダイニング「タヴェルナ」で昼食を取る入居者の皆さん。⑥胃がんの患者宅に、1週間に1回の往診。夜中に頻回にトイレに起きることがつらいようだ、との家族からの訴えに、高輸液カロリーの夜間の滴量を調整するようアドバイスするケアタウン小平クリニック院長の山崎章郎さん。



上左/ケアタウン小平デイサービスセンターで、利用者にフットケアを実施。一人ひとりの尊厳を大切に、その人に合ったケアを実施する。
上右/脊髄損傷の利用者へのアロママッサージ。週に一度だけ、このデイサービスで、背中を上に向けた状態でくつろぐことができる。ケアタウン小平デイサービスセンターの契約者数は47名。要介護4～5が6割である。

新たなコミュニティケアのあり方

2005年10月、東京都小平市にオープンしたケアタウン小平は、緑溢れる都立小金井公園や小金井カントリー倶楽部が近く、森の中のようなしっとりとした空気が辺りを包む住宅街に、ひっそりとたたずむ鉄筋3階建ての建物だ。

ケアタウン小平は、聖ヨハネ会桜町病院の医師であった山崎章郎さんらが、ホスピス病棟でのホスピスケアの経験を基に、がん患者だけでなく、全ての人を対象にホスピスケアを提供し、患者・家族の「住み慣れた家で最期まで」という願いを支えようという思いから生まれた。

計画に賛同した仲間が協力し合い、それぞれの志を胸に、ケアタウン小平というフィールドの中で、医療・看護・介護・住まいの提供や、子育て支援などの事業を展開している。

建物の1階に、山崎さんが経営するケアタウン小平クリニック、NPO

法人コミュニティケアリンク東京が運営するケアタウン小平訪問看護ステーションとケアタウン小平デイサービスセンター、株式会社クロスケアが運営するケアタウン小平ヘルパーステーション(居宅介護支援事業所)などの在宅ケアの事業所と、コミュニティケアリンク東京が地域の子どもたちが生き活きと活動するための遊び場として運営している「アトリエ」がある。2階と3階は、開設者である有限会社暁記念交流基金が管理する賃貸アパート「いっぽく荘」だ。

暁記念交流基金の長谷方^{つねと}人さんは、聖ヨハネ会桜町病院のホスピス・コーディネーターだった。がん患者の相談を受ける中で、独居の患者が増えてきたことを実感し、一人でも、病気になっても、障害を持っても、最期まで住み慣れた地域で自由と責任を持って暮らしていける、そんな生活の場を山崎さんらと検討して構

想したのだ。長谷さんは、認知症になっても、本人に一人で暮らしたいという希望があれば、その家族や代理人との間で賃貸契約をするという。入居者などの相談に携帯電話を手放さない。

訪問看護ステーション所長の蛭田みどりさんは、「家族の方は皆さん、最初は『最期まで家で見てあげたいけれど、どうなるかわからないし不安だわ』とおっしゃいます。『いつでも連絡できます』とお伝えして、一つひとつのケアを一緒にやっているったり、説明したり、痛みが取れることで安心されて、少しずつ、『これなら最期まで看られるかもしれません』と変わってきてくれます。そういう声を聴くと、嬉しいですね」と訪問看護の喜びを語ってくれた。

デイサービスセンター管理者の錦織薫さんは、「少しでもおかしいと感じたら、自分の判断を信じて、医師につないだり、病院に連絡したり、



「今後は一人暮らしの人も含めて、100%目指して家で看取っていきたくですね」と語るケアタウン小平クリニック院長の山崎章郎さん。

ケアタウン小平訪問看護ステーション所長の蛭田みどりさんは「どんな状況でも在宅は可能です」と力強い。

「利用者さんと過ごす空間を大切にしたい」とケアタウン小平デイサービスセンター管理者の錦織薫さん。

有限会社暁記念交流基金の長谷方人さんは「枠に捕らわれず、自由に生きられる場を大切にしていきたい」と言う。

家族に伝えたりと、気づきのためのアンテナを高くしていないと利用者さんの安全は守れません。ヘルパーさんたちにも、日頃『何か変』って気づいたら必ず教えてね、と言っています。皆、こまめに言ってくれますよ」と、重症患者を多く受け入れる上での心構えを語ってくれた。ヘルパーの村尾礼子さんは、『「錦織さんからは一人の方を見ている時にも、フロア全体に目配りするよ」と言われて実行しています」と、気づきのアンテナの高さをしっかり共有しているようだ。

また、「うちでは、その利用者さんの個性に合わせて、ケアを提供するのが基本です。面談に何うと、2時間ぐらいたっぷりかけて、日常の細々としたことから、その方にとってどのようなことが楽しいのか、ご希望などについてしっかりリサーチしてきます。私たちにしかできないことをしなければ意味がありません」と、デイサービスセンターのケアの理念を示してくれた。

ケアタウン小平開設当初から子育て支援事業で、中心的な役割を果たしてきた河邊貴子さん(聖心女子大学文学部教育学科教授)の夫は、ホスピス病棟で山崎医師が看取った。遺族という縁で新たなつながりがで

き、事業に関わることになった。「月に一度のこども広場や、週に一度の子ども文庫活動。年に一度、獅子舞で街を練り歩いたり、運動会をしたり。夏休みの始めには、ボランティア講座を開いて、いっぶく荘やデイサービスでお手伝いをしてもらっています。自然にお年寄りの歩幅やペースに合わせて歩いたりするようになります。毎年参加している子どもは、あるお年寄りが前より元気がなくなってきたことに気づくなど、年を取るということを身近に感じるようです」。河邊さんは、子どもたちを地域に貢献する市民としても育てていきたいと考えている。ゆくゆくは彼らが、緩やかにつながりながらお互いを支え合う、ケアタウン小平のような取り組みを支えていくことになるのかもしれない。

全ての人が安心して 最期を家で迎えられるように

コミュニティケアリンク東京事務局長の中川稔進としのぶさんは、「仕事やボランティアを通じて地域のために働く人たちが、その地域で最期まで過ごせるような基盤整備が必要」と語った。

厚生労働省は2012年を、日本の「新生在宅医療・介護元年」とし、

在宅医療・介護推進プロジェクトを推し進める。

独居でも在宅で安心して最期まで生活することができる環境を整えるには、手厚い医療・看護・介護の手が必要とされる。

山崎さんは「24時間対応で定期的な訪問診療、訪問看護、訪問介護、臨時の往診、訪問看護、訪問介護があれば、ほとんどの人が最期まで家にいられます。病院の役割は変わっていくでしょうね。特定の病気の治療は病院で行い、がんの末期も含め、慢性期の療養生活や人生の最終段階のプロセスは在宅で支えていくことになる」と将来を見すえた。

急性期病院の看護には、これからますます在宅ケアにつながる視点が重視されるようになってくる。

蛭田さんは、「病院の方は、こんな状態で帰してよいのかしら、無理じゃないかしらと諦めてしまったり、いろいろ悩んでいるのではないのでしょうか。在宅でどのように患者さんが過ごしているのか、1日でも2日でもよいので見ていただけると理解が深まるのかなと思います」と、穏やかに笑った。

設立6年を経過したケアタウン小平は、これからも地域とつながり、地域を支えていこう。**K**

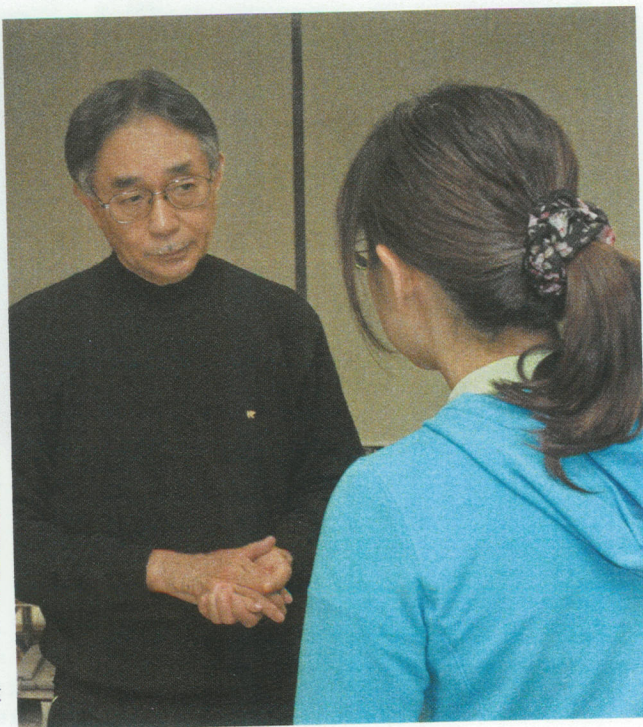


左/佐藤さんは、ケアタウン小平で週1回の訪問看護、月4回のデイサービス、月2回の訪問診療を利用している。同居している娘さんは、「いつでも、電話して相談できるので安心」と話してくれた。ケアタウン小平訪問看護ステーションは現在、常勤スタッフ4名で、24時間オンコール体制を取っている。60名弱の利用者があり、そのうち約7割が、ケアタウン小平クリニックと連携している。上/患者宅では、患者の状態を確認しつつ、日々の生活について家族から一つひとつ丁寧に話を聞く。家族からは、「最初は、不安でいっぱい、最期は病院でと思っていました。でも、一つひとつのことを具体的にこうすればよいと説明していただき、最近はオタオタしなくなりました」と、安心して在宅介護をしている様子。ケアタウン小平クリニックは、約100名の患者を3名の常勤医師が24時間オンコール体制で支えている。月に7～8名を在宅で看取る。

利用者の笑顔と安心が6年の成果



事業所が同じ建物にあるため各事業所共通の利用者については、密な連携が取れる。上/クリニック・訪問看護ステーション・デイサービス合同のカンファレンス。気になっている利用者の状態について話し合う。右/クリニックと訪問看護ステーションの事務所は隣同士。訪問後、利用者の状況について報告・相談がすぐに行える。





上/落ち葉のファッションショー。白いタートルネックの女性が子育て支援事業を支える河邊貴子さん(聖心女子大学教授)。右/「あつまれこども広場」では、紙芝居で前回の振り返りをする。お互いの似顔絵に大きな笑いが起こる。紙芝居を読み上げるのは、NPO法人あそび環境Museum アフタフ・バーバンの北崎圭太さん(写真左)とNPO法人コミュニティケアリンク東京事務局長の中川稔進さん。



新たなコミュニティケアは 各世代をつなぐ



上左/いづく荘のコミュニティダイニング「タヴェルナ」。21室あるいづく荘には、40～90歳代の22名が入居している。家賃は共益費を含めて12万7,700円。上右/ケアタウン小平と遺族の交流会。2010年に亡くなった患者の遺族が参加。各テーブルには、ケアタウン小平のスタッフが座り、遺族と交流を図る。遺族からは、「今だにつらい」「後悔している」などの言葉も聞かれるが、時折、笑い声が起こり、会の終わりには「皆さんに会えて本当によかった」と遺族からの声が上がった。ケアタウン小平には遺族会「ケアの木」があり、遺族が定期的に交流を重ねている。